

# ピソム・カッカ'アル (包まれた火)

## — 「マヤの宇宙観」にみるマヤ思想の内容と その本質についての考察 —

Pitzom Q'aq'al ("Wrapped Fire"):  
A Study of the Content and Essence of Mayan Thought  
Found in "La Cosmovisión Maya (Mayan Worldview)"

実松克義  
SANEMATSU Katsuyoshi



マヤ、カレンダー、時間思想、宇宙感、調和  
Maya, Calendar, Thought of time, Worldview, Harmony

### Abstract

The theme of this paper is "La Cosmovisión Maya (Le Chikaj Mayib)" or Mayan worldview. In contemporary Mayan culture there is a distinct system of knowledge or wisdom which has been passed on for thousands of years since the time of ancient Mayan Civilization. In the Maya-Kiche mythology *Pop Wuj* this system of knowledge or wisdom is represented in a mysterious object called Pitzom Q'aq'al or "Wrapped Fire". What is Pitzom Q'aq'al? What exactly does it symbolize? In order to clarify the very nature of this spiritual symbol this paper attempts to examine six important elements of Mayan culture which may illustrate Pitzom Q'aq'al: (1) concepts of time in Mayan calendars, (2) Mayan Sacred Calendar (Solq'ij Mayib) and 20 day spirits (Nahaules), (3) Kabawil or Mayan dualism, (4) J'l'ol' Ke'xo'l (Jaloj K'exoj), change and continuity, (5) Riilaj Mam (Maximón) and a Tree of Life, and (6) Mayan Cross. Of these especially important is the 260-day Sacred Calendar whose 20 Nahaules work as an ethical code or guiding principles in the social life of Mayan people. And what this calendar finally leads to is the principle of Kabawil, a kind of "dialectic of harmony" which has been developed as philosophical knowledge in the Maya world.

## 1. はじめに

マヤ人はたびたびギリシャ人に喩えられる。それは彼らが極めて理知的な民族であるからだが、同時にまたその思想はこれまで正しく理解されてきたとは言えず、現在でも多くの誤解<sup>1)</sup>が存在する。この論文の目的はそうした誤解を解き、実際のマヤの思想とはいかなるものであるかを、現代マヤ民族の伝統文化の中に検証し、考察することである。現代マヤ民族の伝統思想は一般に「マヤの宇宙観<sup>2)</sup>」と呼ばれる。マヤの宇宙観はスペイン語で La Cosmovisión Maya、マヤ・キチエー語では Le Chikaj Mayib と言うが、現在ではほぼマヤ伝統文化と同じ意味で使われている。ではマヤの宇宙観とは何か。そこにあるマヤ思想哲学とはいかなるものなのか。本論では、このテーマについて、それに関連したいくつかの重要な要素、キーワードを取り上げて考察し、その本質を解明してみたいと思う。はじめにマヤの宇宙観にはその原型を示していると思われる一つの神話が存在する。マヤ・キチエー神話『ポップ・ヴフ (Pop Wuj)』である。マヤ民族の「創世記」とも言えるこの起源神話の中にはマヤの宇宙観の諸要素が含まれているが、それを要約すればマヤ独自の世界観、時間論、生命哲学、そして調和的二元論ということになる。これらは全体としてマヤの宇宙観を構成しているが、すべてマヤ思想の本質を表現するものである。そしてそれは神話の中では「ピソム・カッカ'アル (包まれた火) (Pitzom Q'aq'al)」という言葉に要約されている。ピソム・カッカ'アルは初期マヤの思想を表していると思われるが、その内容とはいかなるものであろうか。それは現代マヤ文化の中にどのような概念として、あるいはシンボル、慣習、行動規範として存在しているのであろうか。ここでは、そうした問題意識の下に、マヤのカレンダーにおける時間概念、マヤ神聖暦とナワール、カバウィルまたはマヤ二元論、ハルウェル・ケッシュヨエル (ハロツホ・ケショツホ) ー変化と継続、リラツハ・マム (マシモン) と生命の樹、及びマヤの十字架の6つを取り上げ、考察をしてみたいと思う。また現代に残されたマヤの宇宙観の思想が、いかにマヤ神話また古代マヤ文明に起源を持つのかも考察してみたいと思う。

## 2. マヤ思想研究

マヤの宇宙観及びマヤ思想の研究はこれまで多くの人々によってなされてきたが、本論に直接関連した、近年における重要な研究者とその研究を概観してみよう。近年におけるマヤ民族文化研究の先駆者の一人であるスイス人民族学者ラファエル・ジラールはマヤ・ Chol'at'ik 族<sup>3)</sup>の伝統文化の研究、及びマヤ・キチエー神話『ポップ・ヴフ』神秘哲学の研究<sup>4)</sup>で有名である。ジラールの独創性はマヤ文化、マヤ文明の本質を現代に残るマヤの伝統、とりわけ神話の研究から解明しようとしたことである。また主にメキシコ、ユカタンの伝統に基づいたメキシコ人思想家、ミゲル・レオン・ポルティージャのマヤ時間思想研究<sup>5)</sup>はマヤ思想の研究を哲学的次元まで深化させた。しかしポルティージャはマヤの時間哲学を運命論的に解釈したため、その誤解はその後長きにわたって研究者のマヤ観を支配することになる。同じメキシコ人研究者で特筆すべきは、

人類学者、メルセデス・デ・ラ・ガルサ (Mercedez de La Garza) である。デ・ラ・ガルザはマヤ文化の宗教、神話と神々、死生観、夢と幻覚、ヴィジョン等を研究したが、そのすべてが蛇 (ケツアルコアトル)<sup>6)</sup> に象徴される超自然的存在から派生していることを指摘した。

アメリカ人類学者の中ではイヴォン・Z・ヴォート (Ivon Z. Vogt)、ルース・バンゼル (Ruth Bunzel)、及びジョン・M・ワタナベ (John M. Watanabe) の三人を挙げておこう。ヴォートはメキシコ、チアパス州、ツォツィル族<sup>7)</sup> のシナカンタン文化、バンゼルはグアテマラ、チチカステナンゴのマヤ・キチエーの伝統、またワタナベはグアテマラ、マヤ・マム族<sup>8)</sup> の研究で知られるが、現代に残るマヤの伝統文化を解明しようとした。彼らの研究は同じアメリカ人類学者、デニス・テドロック (Dennis Tedlock)、バーバラ・テドロック (Barbara Tedlock) 等によって引き継がれる。デニス・テドロックはマヤ・キチエー神話『ポップ・ヴフ (ポボル・ヴフ)』の英訳者として有名である。デニスの伴侶であるバーバラ・テドロックはグアテマラ・マヤ民族の伝統文化、とりわけカレンダーと夢について貴重な調査研究を行った。これらはすべて人類学、あるいは民族学的な研究であるが、同時にまた考古学、碑銘学の視点からも多くの研究がなされている。J・エリック・S・トンプソン (J. Eric S. Thompson)、マイケル・D・コウ (Michael D. Coe) 等らの考古学的研究は現在においても最も包括的なマヤ文明研究である。一方、リンダ・シーリ (Linda Schele)、デヴィッド・スチュアート (David Stuart) らを中心とするマヤ碑銘学の研究成果は古代マヤ思想の解明に大きな進歩をもたらした。

以上はすべて外国人研究者によるものであるが、近年グアテマラ人研究者によるマヤの宇宙観の研究も出現し始めている。一例を挙げると、ラファエル・ランディバー大学のファン・デ・ディオス・ゴンサレス・マーティン等によるキチエー族を中心とするグアテマラ・マヤ伝統文化の研究<sup>9)</sup> がある。さらにはまた、マヤ人自身の中からも優れた研究者が現れている。その代表がマヤ・キチエー族のアドリアン・イネス・チャベス (Adrián Inéz Chávez) とビクトリアーノ・アルバレス・フアレスである。言語学者チャベスはネイティブとしての知識と問題意識に基づいて、まったく新しい視点からマヤ神話『ポップ・ヴフ』を訳出した。一方、哲学者アルバレス・フアレスはさらに進んでこの神話を歴史哲学的視点から解読し、そこに存在するマヤ思想とマヤ古代史の再構築を試みた<sup>10)</sup>。こうしたマヤ人自身によるマヤ思想の研究は、これまでの欧米研究者の関心と方法論による一方的なマヤ観を修正するという意味で、よい効果をもたらしていると思われる。

### 3. マヤ・キチエー神話『ポップ・ヴフ』

さて本論を展開するにあたって、はじめにマヤ・キチエー神話『ポップ・ヴフ』(写真1参照)に触れておかなければならない。1701～1703年頃、グアテマラ南西部高地の小村、チチカステナンゴの聖トマス教会に赴任したスペイン人修道士フランシスコ・ヒメネスはディエゴ・レイノーソ (Diego Reynoso) というキチエー人からキチエー語で書かれたあるテキストを見せられる。ヒメネスは一読してその内容に驚き、その写本を作り、スペイン語に翻訳する<sup>11)</sup>。これが『チチ



図1 グアテマラ・マヤ・キチエ地方地図（作図：小村明子）

カステナンゴ草稿』、後に『ポポル・ヴフ』と呼ばれることになるマヤ神話である。この神話の発見、内容を巡っては謎が多く、また多くの議論が存在する。ヒメネスの言うような、ディエゴ・レイノソという人物が実在したかどうかは、極めて怪しいと思われる。またオリジナルの草稿が存在せず、ヒメネスの写本のみしか残されていないこと、さらにはそのキチエ語の写本には多くの間違いが存在することから、ヒメネス自身が、耳から聞いたものを音写したものである可能性が高いと思われる。この神話写本は19世紀半ばになって、ドイツ人カール・シェルツァー（Karl Scherzer）、フランス人シャルル・エティエネ・ブラシュール・ドゥ・ブールブールによって再発見され、ブールブールはそれをフランス語に訳し、『ポポル・ヴフ』<sup>12)</sup>として出版した。ヒメネスの写本には「ポポ・ヴフ（Popo Vuh）」となっているが、それでは無意味でまた響きが悪いことから「ポポル・ヴフ（Popol Vuj）」と直したのである。

このタイトルは欧米系研究者の間では現在でも踏襲され、「評議の書」などというサブタイトルが付いているが、残念ながら、キチエ語には「ポポル」という単語は存在しない。ヒメネスの写本を音声学的に修正したキチエ人言語学者アドリアン・イネス・チャベス<sup>13)</sup>はネイティブ・

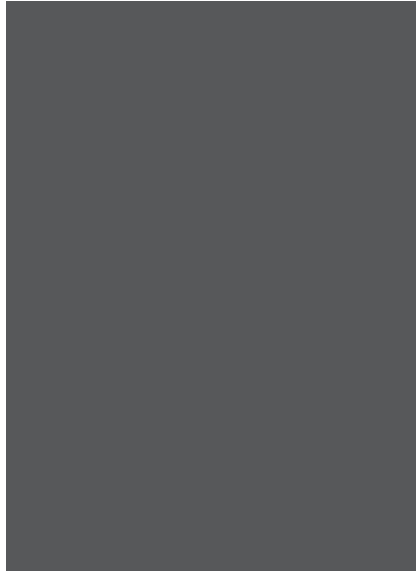


写真1 Adrián Inés Chávez (2007), *Pop Wuj: Poema mítico-histórico K'iche'* 表紙 (筆者撮影)

スピーカーとしての洞察を行い、正しくは「ポップ・ヴフ (Pop Wuj)」と呼ぶべきであると提言した。「ポップ (Pop)」は伝統的な織物であるペターテ (Petate)、また「ヴフ (Wuj)」は紙、本という意味である。マヤ人は昔から床に敷いたペターテの上で伝説や物語を語る習慣があった。またペターテは紡ぎ糸で織られたものがあるが、マヤ文化の伝統では、歴史は「時間の糸によって織られたもの」として表現される。したがって「ポップ・ヴフ」は、現代マヤ文化の伝統に沿って意識すれば、「古代の出来事の本」、あるいは「聖なる時間の書」ということになる。欧米系の研究者の間では、このマヤ神話は依然として「ポポル・ヴフ」と言い慣わされているが、現代グアテマラ・マヤ民族の間では一般に「ポップ・ヴフ」という呼称が定着している。

神話『ポップ・ヴフ』はかなり複雑な構成を持っている。大別すると、前半「世界創造と古代マヤの神話」、及び後半「マヤ・キチュー族の神話と歴史」とに分けられるが、それぞれがまた複数の部分に分かれている。おそらくは場所も時代も異なる複数の物語が長い時間をかけて繋ぎ合わされ、その一部が現在の神話として残されているのだと思われる<sup>14)</sup>。『ポップ・ヴフ』はマヤ創世記とでも呼べる書であるが、中でも前半部分はマヤ思想の起源と原型を示すと考えられる物語が収められており、その内容は極めて示唆に富むものである。神話は神々による世界創造に始まり、やがて人間が創造され、物語は神々の世界から人間社会へと移行する。その中心人物が双子の英雄フナブ (Jun Ajpú) とイシュバランケ (Ixbalamke)<sup>15)</sup> であるが、二人は敵である偽の太陽ヴクブ・カキッシュ (Wucub Kakix) とその一族<sup>16)</sup>、また冥界シバルバー (Xibalbá) の七人の大王<sup>17)</sup> との闘いに勝利し、苦勞の末にマヤ理想社会を建設する。

『ポップ・ヴフ』の内容に関しては、その発見経緯が不透明なこともあって、また部分的に『旧

約聖書』に類似した部分があることから、ヒメネスによる創作ではないかと疑う研究者もいる。しかしその内容は現代マヤ文化の口頭伝承と共通するものであり、たとえ部分的に改竄されているにしても、その本質がマヤであることは疑えないと思われる。さらには近年考古学的研究においても、神話の内容が古代における歴史的事実に基づいていることが確認されつつある。『ポップ・ヴフ』の登場人物、舞台、またストーリーの情景と思われるレリーフや彫像、あるいは神殿等がマヤの各遺跡で発見され<sup>18)</sup>、この神話がマヤ・キチエー地方に限らず、マヤ全地域に広がっているものであり、その起源が極めて古いものであることは確実となった。

#### 4. ピソム・カッカ'アル (火の包み)

ピソム・カッカ'アル (Pitzom Q'aq'al) とはマヤ・キチエー語で「火の包み」または「力の包み」という意味である。Pitzom は「包まれた」、また Q'aq'al は「火」または「力」を意味する。神話『ポップ・ヴフ』の後半はマヤ・キチエー族の神話的起源、民族史であるが、キチエーの神々によってトウモロコシから作られた4人の最初のキチエー人、バラム・キチエー、バラム・アカブ、マフクタフ、イキ・バラム<sup>19)</sup>はその役割を果たすと起源へと去ってゆく。その時にバラム・キチエーが子供たちに授けたものがピソム・カッカ'アルと呼ばれるものである。これは「神聖な包み」「力の包み」「炎の束」などと訳されているが、その本質を言い当てた適訳は非常に難しいと思われる。何故ならばピソム・カッカ'アルとはマヤ思想哲学の最深部の表象であるからである。現代マヤ文化の伝統においてピソム・カッカ'アルはツィッテ (Tzitte)<sup>20)</sup>を意味する。ツィッテ (写真2参照) はグアテマラ・マヤのシャーマン、アハキツヒが儀式の際に使う聖なる道具で、布袋の中に260個のピトの木の実(ツィッテ)が入っている。ピトの木は学名を *Erythrina coralledendron* と言い、メキシコから南米にかけて広範に分布している。この木はマヤ地域においては古代マヤ文明の時代から聖木として崇拝されており、また豆に似たその赤い実は有毒物質アルカロイドを含み、呪術的霊力を持つものとされた。『ポップ・ヴフ』の神々もまたツィッテを使って神託を行っている。後述するマヤの偶像、有名なマシモンもまたこの木を材料として製作される。ツィッテは現代マヤ・シャーマンによって、占い、託宣のために使われるが、そこにはさらに深い象徴的な意味がある。

ツィッテは実際には「ツィッテの実」、「水晶」、「布袋」の三つからなる。この他に小さな「吹き矢」が含まれることがある。マヤ哲学者ビクトリアーノ・アルバレス・フアレスによれば、これらはそれぞれ、

- (1) ツィッテの実=時間 (マヤ神聖暦)
- (2) 水晶=宇宙
- (3) 布袋=空間

を象徴している。また「吹き矢」は双子の英雄フナブ、イシュバランケを象徴している。

ではツィッテは全体として何を象徴しているのか。マヤの叡智、知性、つまり古代マヤ人が創り上げたマヤの科学である。それが最初のマヤ・キチエー人が後世に残した遺産であった。グアテマラ・マヤ民族のシャーマン、アツハキツヒ<sup>21)</sup>はマヤの儀式を執り行う時、必ず頭を布で包む。これもまた象徴としてのツィッテ、すなわちピソム・カッカ'アルである。この場合、頭はマヤ伝統文化の知性、その叡智を象徴している。

マヤ・キチエー地方で最もよく古代文化が残されている村、モモステナンゴ<sup>22)</sup>の伝統によれば、人間は誕生の際に、その存在の中に「火 (Q'aq'al)」を宿して生まれる。この「火」は生きている間燃え続け、やがて死とともに消える。ここでは人間の肉体がツィッテの袋 (Pitzom) にあたり、精神が「火 (Q'aq'al)」ということになる。これは文字通りピソム・カッカ'アル (包まれた火) そのものであるが、ここでは生命の火を意味していることになる。

このようにピソム・カッカ'アルはツィッテであり、マヤの知性であり、叡智であり、さらには生命の火であるが、これらはマヤ思想の根幹を成すものである。

それではピソム・カッカ'アルの内容と本質とはいかなるものであろうか。本論ではそこに込められたマヤの宇宙観の根源の思想を検討し、考察してみたい。

## 5. マヤのカレンダーにおける「時間」<sup>23)</sup>

ピソム・カッカ'アルがマヤの宇宙観における生命の火の象徴であるとすれば、その火はいかなる実体として世界に存在しているのか。一言で言えばそれは「時間」という貌をとって世界に存在している。ただしこのマヤ的「時間」は我々が普通思い浮かべる「時間」とはまったく異なる概念なので、理解する際に注意が必要である。古代マヤ人は生命の火としての時間を説明するために、世界でも類例のないカレンダーを創造した。したがって、はじめにマヤ的時間論の集大成とも言うべきマヤのカレンダーについて説明し、考察を行うことにする。

### 5. 1. 長期計算法<sup>24)</sup>

古代マヤ人は優れた天文学者であった。彼らは長期間にわたり天体の動きを観測し、正確なカレンダーを作った。マヤのカレンダーには大きく分けて3種類あり、これらは長期計算法、太陽暦、そして神聖暦と呼ばれる。長期計算法はある意味で現代の西暦 (グレゴリオ暦) に似ている。この直線的な時間を表すように見える暦法は、過去のある時点からの時間の経過を日数でもって表しているが、そこに使われているのは20進法の変形である。最小限の単位は「キン (キツヒ)<sup>25)</sup>」と言い、現代暦法の「日」に当たる。20キンが1ウイナル (Winal, 20日) であり、それが18回繰り返されると1トゥン (Tun, 360日) になる。トゥンが20回繰り返されると1カトゥン (Katun, 約20年) になり、さらにそれが20回繰り返されると1バクトゥン (Baktun, 約394.3年) になる。そしてバクトゥンが13回繰り返されると一つの世界が終るが、これを大周期と言う。長さ

にして約 5126 年である。

長期計算法の起点とされるのは、いわゆる「4 アハウ 8 クムク (4 Ajau 8 Cumku)<sup>26)</sup>」であるが、これは西暦に直すと紀元前 3114 年 8 月 13 日に相当する。このマヤ世界の創造日は、グアテマラのマヤ遺跡、キリグアの石碑 C (図 2 参照) を始めとしてマヤの諸遺跡の各所に記されている。この日が歴史的事件を表しているのか、あるいは神話上の物語なのかは定かではないが、古代マヤ社会にとって極めて重要な日付であったことには間違いない<sup>27)</sup>。アメリカ人マヤ学者プルーデンス・M・ライスは長期計算法の成立をマヤ政治機構 (王朝) の確立と結び付けている<sup>28)</sup> が、ある意味で、この指摘は正しいと思われる。長期計算法は、解読された内容からしても、歴史的イベントと大きな関係があり、それを記録するために、3 種類のカレンダーの中でも最も後になって整備されたものであると考えられる。しかし同時にまた、長期計算法はその一方でマヤ神話の世界と深い繋がりを持っている。マヤの創世記、神話『ポップ・ヴフ』によれば世界は 4 回創造された<sup>29)</sup> が、最後に創造された世界が「人間」の世界である。それがすなわち現在の世界であるが、その大周期 13 バクトゥンが終わるのが 2012 年 12 月 23 日である。

## 5. 2. 太陽暦

太陽暦 (ハーブ、フナブ<sup>30)</sup>) は太陽の公転に基づいた 365 日周期のカレンダーである。3 種類のカレンダーの中では最もわかりやすいものであるが、その内容は独特なものである。マヤ太陽暦は 18 カ月とウァイエブから成り立っている。最初の月をポップと言い、ついでウオ、シップ、ソツツ、セック、シュル、ヤシュキン、モル、チェン、ヤッシュ、サック、セン、マック、カンキン、ムアン、パッシュ、カヤブと続き、クムクが最後の月である。これらの月にはそれぞれ意味があり、月としての性格がある。その中でも最も重要なのは最初の月であるポップであろう。ポップ (Pop) はすでに述べたようにペターテ (Petate = 織物、ござ) という意味であり、マヤ人は限りなく遠い昔からこの上に座り、神話や伝承、その他の文化伝統を語りまたそれを次世代に継承してきた。したがってポップはまた歴史、時間、出来ごと、継続等を意味する。また同時に権威、最初の日と月、新年の儀式を意味する。それぞれの月は 20 キン (日) から成るが、20 キン (日) x 18 カ月 = 360 キン (日) となり、マヤ太陽暦の 1 年 (365 日) に 5 日足りないことになる。この残りの 5 日をウァイエブと言い、1 年の中でも特殊な意味を持つ期間である。ウァイエブは最初の月ポップとともに太陽暦の中で極めて重要な期間である。ウァイエブ (Wayeb) はマヤ・キチエー語で「待つ」という意味で、文字通り、旧年が終わり、新年が始まる移行的な時期である。つまりそこで生命の火の象徴としての古い太陽が死に、新しい太陽が生まれるのである。

## 5. 3. 神聖暦 (写真 3 参照)

神聖暦 (ソルキッヒ、ツォルキン<sup>31)</sup>) は宗教的目的のために使用される 260 日周期のカレンダーである。この 3 種類のカレンダーの中では、神聖暦は最も古い起源を持つものと考えられている。マヤ神聖暦の発祥に関しては諸説あるが、最も有力な説によれば、グアテマラ太平洋岸、あ



るいはメキシコ南西部太平洋岸の初期マヤ遺跡、イサパ<sup>32)</sup>で誕生したと考えられている。そしてその原型はおそらくは農業暦であったと思われる。実際にこの一帯において260日周期の農業暦が存在し、ごく最近まで使われていたことがわかっている。この農業暦は農事の時期を示す暦であった。この農事は2月に始まり10月に終わる。その期間が260日である。この地域ではウモロコシの二期作が行われているが、一期目は2月の作付けの準備に始まり、4月初旬の野焼きの後、5月1日の雨期の到来とともに種まきが行われる。7月終わりの収穫の後、大暑の後、二回目の雨期が始まり、二期目の種まきが行われる。二期目の収穫は10月の終わり頃である。

神聖暦は農業暦から出発したが、その後そこに多くの人間的要素が加わり、次第に神聖化されてマヤ宗教祭儀の「聖書」になっていったと思われる。

神聖暦は260日から成るカレンダーであるが、その内部構成は

20日x13サイクル=260日

である。

ここには多くのシンボリズムが存在する。はじめに現実的なシンボリズムがある。マヤ人は20進法を採用した。これは人間の手足の指の合計が20本であることに基づく。したがってマヤの一カ月は20日である。13に関しては様々な意味があるが、人間の主な関節の数、横から見た大蛇の歯（上歯または下歯）の数<sup>33)</sup>、月の満ち欠けの約半分、女性の生理期間の約半分等である。ここで重要なのは20が男性数であり、13が女性数であるということだ。その二つを積算した $20 \times 13 = 260$ は女性の妊娠期間を象徴的に表している。したがってマヤ神聖暦は人間そのものを表していることになる<sup>34)</sup>。

しかし神聖暦のシンボリズムはこれだけに留まらない。このカレンダーはマヤ神話『ポップ・ヴフ』、中でも双子の兄妹フナブとイシュバランケと結び付いている。言い換えれば男性数20はフナブの象徴であり、女性数13はイシュバランケの象徴である。また前者は太陽を表し、後者は月を表す。フナブとイシュバランケは神話におけるマヤ文明の建設者である。したがって神聖暦はマヤ世界の創造そのものを表象していることになる。

これら3種類のカレンダーはそれぞれ異なる目的のために製作された。長期計算法は王や支配階級の歴史を刻むために発明された。また太陽暦は年中行事、社会生活に欠かせない存在であった。一方農業暦に起源を持つ神聖暦は宗教祭儀に使用された。しかしそこにある重要な共通点として周期を持っていることが挙げられる。それぞれ長さこそ違え、これらのカレンダーには始まりと終わりがあり、その意味で時間は回帰するものとして認識されている。この種の時間認識は直線的時間と対比して円環的時間と呼ばれることもあるが、マヤ的時間の内容が正しく表現されているとは言えない。何故ならこの時間はただ自動的に繰り返されるものではなく、同時にまた変化があり、継続した発展があるからである。カレンダーの一つの周期が終わる時、マヤ的世界

は刷新される。言い換えれば、古い世界が誕生して成長し、やがて衰退して死ぬと、そこからまた新しい世界が芽生えるのである。これはマヤ人が世界の諸現象が循環的な性質を持っていて、絶えず生成発展の過程にあることを理解していたことを示している。その意味でマヤ的時間とは一もし図示できるとすれば一螺旋的運動に喩えることもできよう<sup>35)</sup>。

いずれにしてもマヤの宇宙観の根幹を成すマヤ的時間とは、本質的な意味において、周期（サイクル）としての時間認識に根差している。モモステナゴの「フナブ・イシュバランケ・マヤ委員会」発行の『マヤ時間概念とその周期<sup>36)</sup>』には、特に重要なものとして10種の周期の存在が述べられている。1日（Q'ij）、13日（Reqa'n q'ij）、20日（Winal）、260日（Solq'ij）、365日（AbまたはTun）、4年（Mam）、52年（Katun/K'ak Tun）、260年（Katunob'）、1040年（Ukajlay Katunob'）、5200年（Jun Winaq Katunob'）である。これらの周期の基本はマヤのカレンダーであるが、同時にその構成部分でもあり、さらには別な要素を積算した複合体である。また複数のカレンダー間関係を表しているものもある。たとえば周期52年は神聖暦（260日）と太陽暦（365日）の最小公倍数である。この周期は古代マヤにおいて、社会において一つの期間が終わり別な期間が始まる重要な節目として重視された<sup>37)</sup>。また独立した特殊な周期もあり、たとえば4年はマム（Mam）<sup>38)</sup>の周期であるが、4つの歳神、ノツホ、イック、キエツヒ、エーがそれぞれ再来する時間を表している。

## 6. マヤ神聖暦とナワール

マヤのカレンダーとそれが表す意味の概略は以上の通りであるが、この中でもマヤ神聖暦はそこにある思想的 content、シンボリズムの深さという点で傑出している。そしてその根幹を成すものがナワールの存在である。ナワールとは何か？神聖暦の一カ月は20日であるが、ただの20日ではない。異なる特徴を持った20個のスピリットが存在する20日である。これらの「日」のことをキチュー語で「キツヒ（Ki'ij）」と言う。またそのスピリットのことを「ナワール（Nahual）<sup>39)</sup>」と言う。バツツ、エー、アツハ、イッシュ、ツィキン、アハマック、ノツホ、ティハツシュ、カウーク、アツハプ、イモツシュ、イック、アカバル、カッタ、カン、カメー、キエツヒ、カニール、トツホ、ツィと20個のナワールが存在するが、それぞれのナワールには意味があり特徴がある（表1参照）。古代マヤ人はこれらのナワールが交替で世界を維持し発展させていると考えた。またナワールの移行と同時にエネルギーもまた変動し、その幅は1（最小）～13（最大）である。こうしてエネルギーレベルを変えながらナワールが移動し、日時が経過する。グアテマラの伝統においては、神聖暦最初のナワールはバツツであり、最後がツィである<sup>40)</sup>。ナワールの一つのサイクルが終わるとまたバツツに戻り、新しいサイクルが始まる。それを13回繰り返すと、神聖暦の一年が終了することになる。

それではナワールとは何なのか。

はじめにナワールとは日の中に存在するスピリットである。ある意味で日本の六曜（先勝・友

引・先負・仏滅・大安・赤口) に似ていないこともない。六曜は暦注の一つであるが、それぞれの日の性格を表している。だがナワールは単なる日の性格を超えた、極めて強い能動的な意思、力、エネルギーを持つものである。その意味で、我々にとって理解しやすい表現を使えば、一種の「時間のスピリット、神<sup>41)</sup>」であるということもできよう。

しかしナワールは単なる時間のスピリットでもない。それはより深いマヤ文化の知識体系の象徴でもある。そしてこの知識体系はマヤ人の人間存在とその諸問題の理解と深く関係している。マヤ・キチエ語のナワール (Nahual) は動詞ク'ナワッシュ (K'nahuax) から派生している。ク'ナワッシュとは「物事 (真実) を知る」という意味で、その名詞形であるナワールは「聖なるもの」「叡智」という意味になる。何故物事 (真実) を知ることが叡智になるのか。それは、突きつめれば、マヤ人が、真実の探究が最善に生きる知恵を生み出すと考えたからである<sup>42)</sup>。

マヤ神聖暦は外国にも紹介されているが、大概是原型を留めないほど意味が作り変えられていて、20 ナワールは世界に数多ある占いの一種ぐらいにしか思われていない<sup>43)</sup>。すでに述べたようにそれぞれのナワールには特徴的な意味がある。たとえばアッハはトウモロコシの茎、子ども、家庭、イッシュは大地、祭壇、ツイキンは鳥、お金、ノッホは叡智、知恵、カンは蛇、大地、カメーは死、シバルバー (冥界)、アカバルは曙光、キエツヒは鹿、労働、カニールはトウモロコシの畑、

表1 マヤ神聖暦の20 ナワール (グアテマラの伝統) (筆者作表)

数	ナワール	基本的な意味
1	バツツ	より糸、織物、始まり、統一、家族と村の意味
2	エー	道、運命、食べ物、歯、権威、旅
3	アッハ	トウモロコシの茎、種蒔き、子供、家庭、家畜、豊かさ
4	イッシュ	山々、平野、大地、マヤの祭壇、ジャガー、力、エネルギー
5	ツイキン	鳥、よいこと、お金、生産、多産、幸運、自由
6	アハマック	祖父たち、死者たち、許し、力
7	ノッホ	知性、叡智、霊性、能力、理性、芸術
8	ティハッシュ	苦しみ、苦痛、病気、危険、両刃の刃、雷 (稲妻)
9	カウーク	雨、守護霊、稲妻、権威の棒、聖なる火と声の二元性
10	アッハプ	太陽、フナプ、説教者、霊性、ヴィジョン、よいこと、悪いこと
11	イモッシュ	水、海、不穏、争い、狂気、生産
12	イック	空気、自然、世界、祭壇
13	アカバル	曙光、オーロラ、夜明け、暗さ、生命の刷新
1	カット	火、網、正義、抑圧、囚われ、存在の中心、生命の継続
2	カン	蛇、グクマツツ、大地、尊敬、真実、黄色い地平線
3	カメー	死者の日、死、喜び、再生、静寂、よい行い
4	キエツヒ	鹿、力、労働、基本方位、聖なる棒
5	カニール	種蒔き、トウモロコシの種、食べ物、芽吹き、創造
6	トッホ	病気、苦痛、供物、罰、罰金、エネルギー、光
7	ツイ	犬、遊び、友情、権威、貞節、不倫、出産

ツイは犬、問題、という風に。そこでこれらを一瞥して素朴な感想を持ち、アッハに生まれた人はトウモロコシが好きな子供に育つとか、カメーに生まれた人は運が悪いとか、勝手に想像するのは自由だが、しかしそれは我々がマヤ文化を知らないというだけのことである。ここにある意味とそのシンボリズムは極めてマヤ的な独特のものである。トウモロコシの茎はただのトウモロコシの茎ではない。フナブとイシュバランケがシバルバーに旅発つ前に植えた聖なるトウモロコシが成長したものである<sup>44)</sup>。またマヤ文化において死は否定的なものではない。死はすべての根源であり、そこから生命が誕生するのである<sup>45)</sup>。

またそれぞれのナワールには必ず肯定的な面と否定的な面がある。たとえば神話『ポップ・ヴフ』において、太陽の化身であるアッハブは、月の化身であるイシュバランケとともに壮大な歴史的大事業を成し遂げ、マヤ文明の礎を築く。その意味で、アッハブは明らかに偉大なナワールであり、実際、この日に生まれた人間は偉大なマヤのアハアキヒになる資質を持つという。このナワールはことばと知性の才能を象徴し、また天性の説教者であり、さらには偉大な指導者の資質を持つことを意味する。しかし同時にフナブはまた吹き矢使いのフナブとしても有名であり、その大事業の過程において、吹き矢を武器とした強力な殺戮者でもあった。したがってこのナワールには同時にそうした危険も同居しているのである。

これと対照的にティハッシュは苦しみ、悲しみ、問題を象徴するナワールである。ティハッシュ (Tijax) は語義的にはティヒバル (Tijibal = 供給するもの) とカッシュ (Kax = 苦痛) の合成語である。このナワールは神話『ポップ・ヴフ』に登場する悪の系譜、ヴクブ・カキッシュ一族、シバルバーの大王、フン・バツツ、フン・チョウエン<sup>46)</sup> によって苦しめられた古代マヤ人の苦難を表していると言われる。この日に治療や祈禱を行うアッハキヒはまずこうした生来の桎梏を浄化する儀式から始めなければならない。しかし、同時にそれはまた人間存在における苦しみを理解し、追体験するという意味で重要なものである。さらにはまたこのナワールはその否定的次元を超克しうる大きな可能性をも秘めているのである。

したがって、言葉の根源的な意味において、ナワールには、よいナワールも、また悪いナワールも存在しない。ナワールは、誕生の、あるいは現実世界の、出発点としての状況、諸条件を表し、それを超克する指針を示すものである。ナワールが叡智であるとはこのような意味においてである。したがって、ナワールは人間の諸相を表す体系を成して、20個全体として複雑で深遠な世界を構成している。それはマヤ的な世界における人間存在を全体として表象する知識システムである。その意味でマヤ的世界の曼荼羅、時間の曼荼羅<sup>47)</sup> とも言い換えることもできよう。ただこの曼荼羅は極めて人間的な特徴を持っている。もっとはっきり言えば倫理的な傾向を持っている。マヤ的理想に沿って生きる人生の指針がそこに明確に示されているのである。したがって20ナワールとは人間性の本質とその善悪の指針を網羅した一種の倫理法典<sup>48)</sup> とも言えるのである。

以上の説明でわかるように、ナワールの概念は数千年にわたるマヤ伝統文化に根差した生命哲学・思想を表現しているが、ナワールの持つ属性の中で最も重要なのはやはり二元論的側面であろう。現代マヤ文化のフィールドワークをしていると、「調和」というキーワードを頻繁に耳にす

る。マヤのシャーマン、アハキッヒは様々な調和の儀式を行う。それは人間世界の調和から始まり、動物、植物、自然、そして宇宙に及ぶ。何故このようなことをするのか。それは彼らの考えでは、世界には肯定と否定の二種類のエネルギーが存在し、そのため絶えずそのバランスを取る必要があるということである。すでに述べたように、ナワールの中にもやはり二種類のエネルギーが存在し、そのためナワールは固定的存在ではなく、絶えず変化する流動的な存在である。

人間は生きている限り絶えず肯定的エネルギーと否定的エネルギーに晒される。だから絶えずその間でバランスをとる必要があるのだ。調和を実現することが重要なのだ。筆者のキチエー語の先生でもあるモモステナンゴの指導的知識人、マヌエル・アハシュップ・ポロツホ（Manuel Ajxup Poroj）はこのことを繰り返し、繰り返し述べていた<sup>49)</sup>。筆者はまたサンフランシスコ・エル・アルトのアッハキッヒ、フェルミン・ゴメス（Fermin Gómez）がラ・レジェンダで行ったマヤの儀式に参加したが、その儀式の目的は世界の調和であった。ケツアルテナンゴのマヤ哲学者ビクトリアーノ・アルバレス・フアレスはさらにそれを敷衍し、個人における調和から宇宙における調和まで、マヤ世界に存在する5つの調和<sup>50)</sup>を語っている。

ではそのバランス、均衡、調和はいかにして実現できるのか。マヤ人はこうした問題意識をもって、独特の構想を持つマヤ二元論哲学を創り上げた。それがカバウルの原理と呼ばれるものである。

## 7. カバウールまたはマヤ二元論

カバウール（Kabawil）<sup>51)</sup>は神話『ポップ・ヴフ』に登場する神々の中でも最も古いものに属する。マヤの世界創造の過程において天空が創られる。その時天空に存在したのがカバウールである。カバウールは「神」「二重の眼」など様々に訳されているが、その原義はKeb（二つ）とWil（ヴィジョン）という意味で、二つのヴィジョン、つまり二元論的存在を暗示している。マヤ二元論を表す用語としてのカバウールは現代マヤ文化の間でそれほど定着しているわけではない。多くはただ単にマヤ二元論、あるいはマヤ宇宙観の二元論的傾向という表現に留まる。しかし進歩的なマヤの知識人、アハキッヒあるいは研究者の間で使われており、マヤの思想の真髄を表す適切な用語であると思うのでここではそれを踏襲する。

カバウールとは何か。

一言で言えば、異質な二者の協力によって世界の創造、あるいは発展がなされるということである<sup>52)</sup>。カバウールはその原理を表している。カバウールはその語源からもわかるように、はじめに神話『ポップ・ヴフ』の中にみられる思想原理である<sup>53)</sup>。いくつか例を挙げてみよう。世界の始めにテペウ（Tepeu）とグックマツツ（Gukmatz）という原初の神々が存在した。アドリアン・イネス・チャベスはテペウを「無限の存在」、またグックマツツを「隠された蛇」と訳している。前者は宇宙の神、また後者は大地の神（海の神）であるが、両者の結合（結婚）によって世界は創造された。現代マヤ文化ではこの両者は通常「父なる天空（Ajau Tepeu）」、「母なる大地

(Chuch Gukmatz)」と呼ばれ、世界創造の父と母として位置付けられている。さて、世界創造の際その大事業を任された二人の神々がいる。名前をツアコル (Tzakol) とビトル (Bitol) と言い、通常前者は建設者、後者は形成者と訳される。わかりやすく言えば、ツアコルの仕事は建設することであり、いっぽうビトルの役割は出来あがったものの手直しをすることである。この両者の協力関係によって世界創造がなされた<sup>54)</sup>。また現在も維持、発展し続けている。神話時代の終わりに登場する双子の英雄フナブとイシュバランケの関係もまたカバウイルの原理を体現している。フナブは男性 (または兄) であり、イシュバランケは女性 (または妹) である。この両者は互いに協力しながら、暴君ヴクブ・カキツシュー族、冥界シバルバーの大王を打ち負かし、最初のマヤ文明を建設する。神話『ポップ・ヴフ』にはこうしたカバウイル的原理に至るところにみられ、ある意味でこの神話そのものがマヤ的二元論、カバウイルの思想を表現する目的で編纂された聖典であるとも言えよう。

カバウイルの原理は現代マヤ文化の中にも色濃く残されている。たとえばアッハキヒはトウモロコシの粒を使って、占い、あるいは宣託を行う時、必ず二つずつのセットに並べる。このトウモロコシの粒はそれぞれ神話『ポップ・ヴフ』の主人公、双子の英雄兄妹、フナブ、イシュバランケを象徴しており、そこに強いスピリットが宿っているのである。またモモステナンゴの伝統では、新しいマム (マヤ新年のナワール) の到来の際、マヤの伝統 (叡智) を継承する儀式を行うが、それは祖父から女性の孫へ、また祖母から男性の孫へと伝えられる (写真4参照)。またこの時右手と左足、左手と右足を赤い糸で結ぶ<sup>55)</sup>。これはカバウイルの原理に即したものである。

カバウイルの原理はまた人間存在の条件の中にも存在すると思われる。それはある意味で人間社会の基盤を成すものとも考えられ、恋愛関係、夫婦関係、親子関係、友人関係、ビジネス・パートナーシップ等の社会生活における人間関係を維持発展させる上で欠かせない基本原理を語っていると思われる。まさに人間は他者との協力関係の上に成立している存在である。さらにはまた生命としての人間が二個の目や耳、二本の手足、あるいは二系統の神経システム、二つの脳を持っていて、その協力関係において生存しているという事実は、この原理が人間存在の極めて深い次元に内在していることを示唆している。

カバウイルはある意味で西欧哲学の弁証法に似ていないこともない。ドイツの哲学者 G. W. F. ヘーゲル<sup>56)</sup> が提言したこの哲学思想は、正、反、合という思想の発展を述べたものであるが、テーゼ (命題=正) とアンチテーゼ (反対命題=反) が対立し、衝突することによって、問題が止揚され、ジンテーゼ (より高い次元の思想=合) が生まれるというものである。ただそこにはやはり決定的な違いがあり、マヤ二元論カバウイルにおいては、そうした衝突、対立はプロセスとして想定されていない。そこに存在するのはあくまで相補性に根差した協力関係であり、だからこそ協力する二者は異質な存在である必要があるのである。そしてこの関係が目指す究極の目的は世界の調和ということである。



写真2 ツィッテ (筆者撮影)



図2 キリグア遺跡石碑Cに記された世界創造 (筆者撮影、作図:小村明子)



写真3 マヤ神聖暦 (西暦2011年カレンダー、上方に横に並ぶのが20ナワール) (筆者撮影)



写真4 モモステナンゴの宇宙観 (*Ri Mam*  
(1995). 表紙) (筆者撮影)



写真5 アティトラン湖 (筆者撮影)



図4 マヤの十字架の意味 (筆者作図)



写真6 マシモン (リラッハ・マム) (筆者撮影)



写真8 マヤの儀式 (筆者撮影)



## 8. ハルウエル・ケッシュョエル (ハロツホ・ケショツホ) —変化と継続

カバウィルの思想はピソム・カッカ'アルの最深部を表すものであると思われる。このユニークなマヤ二元論はマヤ・キチエー神話『ポップ・ヴフ』を貫く根本思想であり、疑いもなくキチエー文化の本質であるが、しかし同時にまたグアテマラ・マヤ民族全体が共有している思想でもある。ただこれらのマヤ諸民族は複雑に伝統が分化していて、それぞれが独特な思想文化を継承している。その中でも、サンティアゴ・アティトランのマヤ・ツトゥヒル族<sup>57)</sup>の伝統はその神秘性において特筆すべきものである。したがって、マヤの宇宙観の本質への理解をさらに深めるために、ここでツトゥヒル族の根本思想とも言えるハルウエル・ケッシュョエルについて触れておくのは無駄ではないと思われる。

この思想概念は現代マヤ宗教文化の研究者に比較的よく知られているものである。はじめに発音についての注が必要である。ハルウエル・ケッシュョエルは欧米系の研究者によって一般にハロツホ・ケショツホ (Jaloj K'exoj) と呼ばれているものである。これは文法的には正しいが、話し言葉としては使われない。実際のツトゥヒル語では J'l'ol' Ke'xo'l (ハルウエル・ケッシュョエル) と発音される。したがって本論では用語として「ハルウエル・ケッシュョエル」を使うことにする。

近年においてハルウエル・ケッシュョエル (ハロツホ・ケショツホ) 概念の重要性に着目した外国人研究者にアメリカ人類学者、ロバート・S・カールソン及びマーティン・プレクテルがいる。二人はサンティアゴ・アティトランを中心としたグアテマラ・マヤ地域の伝統文化を研究した結果、マヤ文化の精神的基盤が聖山、聖木、聖なる洞窟を含む自然信仰にあると考えた。その内容は1991年の「死者の開花：高地マヤ文化の一解釈<sup>58)</sup>」に詳しいが、この論文ははからずも人々の間にハルウエル・ケッシュョエル (ハロツホ・ケショツホ) についての関心呼び覚ますことになった。それによれば、現代マヤ文化においては、自然は生きている存在であり、その中で生きる人間とその社会を絶えず涵養し維持発展させる生命の源泉の様なものである。そしてその維持発展をなし遂げる基本概念がハルウエル・ケッシュョエル (ハロツホ・ケショツホ) と呼ばれるものである。

それではハルウエル・ケッシュョエルとはいったい何なのか。そこにはいかなるマヤの思想が存在するのか。筆者自身の調査研究に基づいて、以下にその考察を試みてみたい。

はじめにことばの意味から始める。このツトゥヒル用語は字義的には、二つの単語から成り、ハルウエル (J'l'ol') は「変化」、またケッシュョエル (Ke'xo'l) は「継続する」という意味である。したがって、端的に言えば、「変化と継続」を表すことになる。

具体的にはハルウエル・ケッシュョエルは二つのことを意味する。

ひとつは「政治体の継承」

もう一つは「マヤの宇宙観の継承」

である。ハルウェル・ケッシュェルは政治と宗教の二つの分野に係る概念であることがわかる。

一般的に言って、マヤ文化は古代マヤ文明から現代マヤ文化に至るまで、極めて政治色の強い文化である。そこでは宗教と政治は絶えず複合体として存在していた。たとえばメキシコ、チアパス州に栄えたマヤ古典期の都市国家、パレンケ<sup>59)</sup>のパカル王の長男でその後継者のキンニチ・カン・バラム (K'inich Kan Balam) は有名な十字架神殿群を建造しているが、これらの神殿にはパレンケの三大神、GI、GII、GIII<sup>60)</sup>を祀るマヤの十字架の壁板が収められているが、その十字架の両脇に立っているのは年少時、成人後の自らの姿である。これは古代マヤの宗教文化における為政者の影響力を示すものである。

しかしマヤ文化における政治と宗教の複合はただ単に宗教が政治的に利用されただけではないように思われる。そこにより本質的なつながりがあるように思われるからである。それは一言で言えば、マヤ文化の中では政治と宗教が別々に存在しているのではなく、統一体として存在しているということである。そして大きな意味で政治的理念もまた、マヤの宇宙観の一部として内包されるように思われるのである。言い換えれば、マヤ人は政治をマヤの宇宙観の現実的实践であると考えているように思われるのである。

政治体の継承とは、要するに現役の首長（市長、町長、あるいは村長）が去り、新首長が引き継ぐということである。その変化と継続を表す。ただマヤ社会の場合はコミュニティのトップだけではなく、行政、議会、司法、警察、学校等、各部署の長、責任者すべての交替と継続を表す。現代マヤ人は政府、自治体、権威というものは定期的に変わるものであり、またそうでなければならぬと考えている。何故なら変化なくしては改善も進歩もないからだ。ただし同時にまたそこには過去からの継続がなければならぬ。そしてその継続の際の指針となるもの、それがマヤの宇宙観である。

一般に、マヤの宇宙観とはマヤの伝統文化、とくに宗教的な世界観を意味する。マヤの宇宙観はマヤ民族の長年にわたる歴史の中から生まれた伝統であるが、そこには経験と思索の結晶とも言える民族の知恵、叡智が含まれている。マヤの宇宙観は古代マヤ文明に起源を持つものであるが、同時に時代とともに発展を重ね、現在の様な体系になったものである。そこには過去からの遺産があり、また変化がある。伝統は絶えず改善されることによって継承されるのである。

マヤの宇宙観の内容とは何か。サンティアゴ・アティトランのアッハキッヒ、ニコラス・ツィナー・レアンダ (Nicolas Tziná Reanda) によればそれは次のような内容を含む。

平和、尊敬、教育、母なる大地、母なる自然（太陽、月、星、空気、川等）、男性、女性、聖なる食べ物を共有すること、種蒔きの祈願、豊作の祈願、非暴力、嘘をつかない、化学物質を使わない、マヤの祈り、等である。

マヤの宇宙観が極めて具体的な内容であることがわかる。そこには紛れもない自然への尊敬と畏怖が感じられる。また秩序ある社会生活を営むための高度な理念、強い倫理性が感じられる。

ハルウェル・ケッシュェルの概念はマヤ・ツトゥヒル族だけに限られているわけではない。マヤ・キチエー族にもまた同一の概念が存在する。たとえばモモステナンゴの伝統では同一の概念はハロム・ケシヨム (Jalom K'exom) と呼ばれる。ハロム Jalom は「動作」、または「変化の動き」、ケシヨム K'exom は「変化する」ということである。ハロム・ケシヨムとはすべてのものは「変化する」ということを表している。モモステナンゴのマヌエル・ポロツホによれば、この変化は政治、社会、文化、家族、宗教、経済、あるいは物質、地理、身体、精神等すべての領域を含む。とりわけ、

政治体の変化 (または政治的变化)

コフラディアの変化 (または宗教的变化)

の二つを指す。コフラディア<sup>61)</sup> は普通「信徒会」と訳されるが、村々の守護聖人をケアするグループのことである。

ここでも政治と宗教の並立が見られる。政治的变化に関しては、2011年9月11日にグアテマラで大統領選を含む総選挙があり、その結果はマヤ社会に大きな変化をもたらした。宗教的变化に関しては、マム・エー (Mam E) の時代が2012年2月12日に終了し、翌日からマム・ノッホ (Mam Noj) の年が始まる。ノッホは叡智という意味のナワールであり、このナワールによる新しいサイクルは希望をもたらすものである。

それではハルウェル・ケッシュェル、あるいはハロム・ケシヨムは何を意味するのか。

マヤ文化の維持発展の根本原理を意味していると思われる。伝統文化はいかにして継承されるのか。変化と継続によってである。逆説的な言い方になるが、伝統文化は変化することによってしか継承されない。何故なら時代は常に動いているからである。社会は常に変化し、そこに住む人間もまたその生活条件もニーズも変化し続ける。したがって変化なくしては文化の維持、発展は不可能である。しかし同時にまた文化はただ無節操に時代の流れに合わせて変化すべきものでもない。理念なき変化はただ社会的混乱と倫理的退廃を産むだけだからだ。したがって必然的にその変化を導く指針、経験に裏打ちされた知恵が必要になる。それがマヤの宇宙観である。マヤの宇宙観は人間とその社会のありとあらゆる領域を含むが、その根本精神はよいものは残し、悪いものは改善するということである。こうして文化の継続が可能となる。ここにはまたマヤ独特の時間思想が存在すると考えられる。それはこの変化と継続の一連の行動の中で螺旋的な運動として反映されているように思う。ハルウェル・ケッシュェル、あるいはハロム・ケシヨムはそうしたマヤ的思想の一つの現れとみなすことが出来ると思われる。

## 9. リラッハ・マム (マシモン) または生命の樹

現代マヤ文化におけるマヤの宇宙観は様々な形態を取って表現されているが、実態ある神、偶

像として表象されている場合がある。オリンテペケのマヤの死の神サン・パスクアル・バイロン (San Pascual Bailón)、スニールのサン・シモン (San Simón)、サンティアゴ・アティトランのマシモン (Maximón) 等である。これらは純粋なマヤの神々というよりは、カトリックと融合したシンクレティズム<sup>62)</sup>の偶像と言った方がふさわしく、複雑な性格を持っている。グアテマラの著名な作家でサン・シモンの研究者でもあるエクトール・ガイタンはサン・シモンの成立を19世紀半ばとして、マシモンをその中に含めている<sup>63)</sup>。確かに現代グアテマラ・マヤ文化において広く崇拝されているサン・シモンは、征服者ペドロ・デ・アルバラード、ユダ・シモン等複数の名前を持つことから推定できるように、スペイン人征服者、あるいはカトリックに抑圧されたマヤ民族が困難な状況の中で創造したシンクレティズムの偶像である。その起源は19世紀以前に遡ることはないであろう。またサン・パスクアル・バイロンのご神体は骸骨であり、その遠い起源は遠く古代マヤの死の神、あるいは『ポップ・ヴフ』のシバルバーであるかもしれないが、実際には16世紀スペインの聖人、聖パスカル・バイロン<sup>64)</sup>の信仰がグアテマラにおいて土着化したものである。

しかしこれらの混交神と異なり、サンティアゴ・アティトランのマシモン (Maximón) (写真6参照) はやや性格を異にし、古代マヤの宗教的伝統と何らかの具体的な接点を持っているように思える。マシモンはそれとよく似た偶像サン・シモンと混同されているが、後者が混沌としたマヤとキリスト教のシンクレティズムであるのに対し、かなりの程度にマヤ的な性格を残しているようである。それはこの偶像がサンティアゴ・アティトランの歴史と深く結び付いていることと関係しているように思われる。

マシモンは Mam Xim Món、あるいは Ma Xmoon の略で、マヤ・ツトゥヒル語で「縛られた (Xim) 老人 (Mam)」という意味である。マム (Mam) とは「古いもの、老人」という意味である。何故このような名称が付いたのかは諸説ある。一般的な説によれば、マシモンは木の仮面と聖なる石、及び布の胴体と手足から成るが、この布はぼろ切れを重ね合わせたものであり、それを束ねて何度も糸で縛り、しだいに身体の形を整えてゆくことに由来するようである。

マシモンはサンティアゴ・アティトランのツトゥヒル族の祖霊と言ってもよい存在だが、その起源についても諸説ある。ある伝承によれば、かつてこの地にはアハキツヒの他に強力なアハイッツ<sup>65)</sup>のグループが存在した。彼らはブルヘリーア (黒呪術) を使って人々に危害を加え、女性を誘拐し、その悪行は止まることを知らなかった。人々は苦慮の上マシモンを創造して、その力によりとうとうアハイッツを打ち負かしたという。

マシモンはまたこの地の伝説的なアハキツヒ、フランシスコ・ソフェル<sup>66)</sup>が製作したという説もある。あるいはその化身であるという説がある。フランシスコ・ソフェルは19世紀に実在した人物で、サンティアゴ・アティトランでアハキツヒとして超人的な活躍をし、またそのために苦難に遭遇し政治的迫害を受ける。しかし死後その存在は神話化され、現在でも最高の表現でもって賢者として尊敬されている。

しかしこれはマシモンの起源に関する表層的な仮説に過ぎないと思われる。おそらくは比較的

最近において追加されたものであろう。

1950年代にサンティアゴ・アティトランの伝統を調査研究したアメリカ人類学者、E・マイケル・メンデルソンは古典的著作『マシモンのスキャンダル<sup>67)</sup>』(1965)を著したが、マシモンの古い起源をマヤの新年の神「マム」に求めている。当時の伝承によれば、誕生したばかりの若いマムは雨と風そして雷の神であり、豊饒の洞窟の中で女性たちと交わる。彼はこの行為の罰として年老い、やがて新しいマムに生まれ変わる。つまり人間化された神の「死と再生」の象徴なのである。ではマムはいかにしてマシモンとなったのか。メンデルソンはその過程に外来宗教であるカトリックの力が作用したと考えた。マヤ太陽暦では一年の最後にウァイエブという五日間の特殊な期間が存在するが、これがある時期にカトリックの聖週間と合体した。その時マムの祭儀はマシモン信仰に変化したのである。実際にマシモンは現在では聖週間<sup>68)</sup>の時期に他の聖人と一緒に祀られる。筆者もまたこの経緯を調査研究したが、おそらく真実はそれほど遠くないと思われる。

マシモンはまた別名をリラッハ・マム (Riilaj Mam) とも言う。マシモンとは外部の人間が使う用語で、ツトゥヒルの人々はこの偶像をリラッハ・マムと呼ぶ。リラッハ・マムとは「偉大な祖父」、あるいは「二度にわたってマム」という意味である。この「二度にわたって」というのはマヤ神話にたびたびみられる表現で、マヤの二元論的傾向を示唆するものである。

ではリラッハ・マムとは何を意味するのか。

何人かのツトゥヒルのアハキヒ、歴史家等に確認したが、リラッハ・マムはアハウ (Ajau) のことである。アハウは別名をテペウとも言うが、古代マヤ文明にも存在したマヤの最高神のことである。アハウはマヤ文字による記述にも、神話『ポップ・ウフ』にも登場する。現代マヤ文化においては大地の神グックマツツとともにマヤの二大神として存在している。アハウは二つの単語 Aj-Au から成り、その語義は「生命 (息) を与える者<sup>69)</sup>」という意味である。カバウルの関係においては、グックマツツが物質を象徴するのに対して、アハウは精神、つまり時間のスピリットを象徴している。

その意味でリラッハ・マムの起源は極めて古いと思われる。おそらくは初期マヤにまで遡るであろう。

リラッハ・マムはサンティアゴ・アティトラン近くのチュコクシュ・アコム (Chukox Ak'om) で創造された。これはツトゥヒル語で「薬草のへそ」という意味である。この聖地において、ピトの木の幹を材料にして製作された。アハウの化身、リラッハ・マムの製作に関しては伝承があり、それによれば人々は山中のありとあらゆる木々に呼びかけて回ったという。そしてピトの木の前に来ると神託があり、それを聖なる木と定めて製作が行われた。

ピトの木になる実は前述したツィッテであり、したがってピトは生命の樹である。その木を材料にして作られたリラッハ・マムもまた生命の樹の象徴である。さらに興味深い事実がある。リラッハ・マムの顔はピトの木の仮面であるが、その中には聖なる石がはめ込まれている。この石はマヤの叡智を象徴するものである。

ところでこの生命の樹に関しては興味深い伝承<sup>70)</sup>が伝わっている。それによれば、かつて生命の樹は文字通り世界の生命を生み出す大木であった。そこには植物から動物、人間までありとあらゆる生命がたわわに実り、息づいていた。しかしあまりに重くて持ちこたえられなくなり、やがて枝が折れて、実っていた生命は地上に落ちてしまった。だが落ちた生命は土中に種を撒き、そこからまた新しい生命が芽吹いた。いっぽう大木はその大半が枯れてしまい、残ったのは木の株と根っこだけになってしまった。だがこの部分だけはその後も生き残り現在でも続いている。この木の株は「父、母 (Ti Tie Ti Tixel)」と呼ばれる。この伝承が示唆するものは、一言で言えば、生命の根、民族文化のルーツの重要性ということであろう。マヤ民族は高度な独創性を持つ文化を建設し、古代から長きにわたって維持発展させてきた。またその目的のためにはいかなる労力も惜しまなかった。それは彼らが、本質的な意味で、民族文化の伝統が生命の存続に不可欠な存在であることを知っていたからだと思われる。

## 10. マヤの十字架

思想表象としての生命の樹は世界中に存在するが、とりわけマヤにおいては重要なシンボルとして聖化された。たとえばサンティアゴ・アティトランからそれほど遠くないメキシコ、チアパス州、タパチュラ近郊のイサパ遺跡には石碑（イサパ遺跡石碑5）に彫られた見事な生命の樹が存在する（写真7参照）。この石碑レリーフのモチーフはイサパ石碑の中でも最も複雑なものであるが、その光景はサンティアゴ・アティトランのリラッハ・マムの伝承を彷彿とさせるものである。このモチーフを詳細に研究したアメリカ人考古学者・美術史家 V. ガース・ノーマンによれば、ここには少なくとも 12 人の人間、12 匹以上の動物、25 個以上の植物及び物体、そして 9 つの神々の顔が存在するという<sup>71)</sup>。しかし何と言っても圧巻は中央に聳える大木、生命の樹である。その豊かな枝はまさに折れんばかりにたわみ、これらの生命を地上にもたらしめているようにみえる。そしてその木は下に根を張り、またさらにその下には豊かな水が存在する。この石碑のレリーフは紀元前 300 ～ 100 年頃に製作されたと考えられている。

この生命の樹のモチーフはその後独自の発展を遂げ、マヤ古典期においてマヤの十字架として様式化され、マヤの宇宙観を表象するシンボルとなる。もっとも、より正確な経緯を言えば、マヤの十字架の起源は生命の樹だけではなく、同時にまたマヤ天文学の天空神話にもあると思われるが、地上世界の生命の樹がその中核的存在であったのは間違いない。いずれにしてもマヤ精神史の歴史的展開とともにマヤの十字架が成立し、また様々なヴァリエーションが創られてゆくことになる。都市国家パレンケはその代表とも言えるが、ここでは十字架に捧げられた神殿群まで存在する。その一つ、「葉十字の神殿」にある十字架は豊穡のシンボルであり、そこに宿るのはマヤ人の主食であるトウモロコシの神である<sup>72)</sup>。また同じパレンケの碑銘の神殿、パカル王の石棺の蓋に描かれた十字架は天空（ヴクブ・カキッシュ）と冥界（シバルバー）を結ぶ結節点を成しているが、十字架の横の腕は二元論的生命観を象徴する双頭の蛇として描かれている<sup>73)</sup>。



写真7 イサバ遺跡石碑5（筆者撮影）

マヤの十字架はまたマヤの絵文書にも描かれている。その一つ『マドリッド絵文書<sup>74)</sup>』75～76ページにある宇宙絵（図3参照）について簡単に述べたい。この絵はマヤのカレンダー神聖暦を表している。南東、北東、北西、南西の世界の四隅を基本点として、1イミッシュ（イモッシュ）～13アハウ（アッハブ）に至る260日が描かれている。これはメキシコ、ユカタンの伝統に基づくもので、ここでは神聖暦20ナワールはイミッシュ（イモッシュ）から始まる。ところで絵の中心には20ナワールが描かれているが、その中には生命の樹が単純化された十字架が置かれている。その右側に座っているのが太陽神イツァムナ<sup>75)</sup>であり、左側に座っているのが月の神チャクチェル<sup>76)</sup>である。ユカタンの伝統においてはこの両者が世界と人間を創造したとされる。マヤ・キチュー神話に置き換えれば、イツァムナはフナブ、チャクチェルはイシュバランケということになる。ところでイツァムナの上には三つの粒があるが、これはトウモロコシの粒を象徴している。したがってイツァムナはトウモロコシの神でもあるが、その粒にはまたナワール・イック<sup>77)</sup>が描かれている。イックは空気、息、生命を与えるものという意味を持つナワールである。したがって解釈すれば、これはマヤ人が太陽、月、空気、及びトウモロコシを生命の維持発展において本質的なものと考えていたことを示唆している。

マヤの十字架は現代マヤ文化においても存在し、カレンダーとともに古代マヤの思想哲学を現代に伝える表象となっている。この十字架は多くのシンボリズムを含むが、その基本的な意味は次の通りである（図4参照）。

マヤの十字架はまず基本方位を意味し、それぞれの方位に色があり、意味がある。東（赤）は



図3 マドリッド絵文書 75～76 ページ (*El Códice de Madrid: Codex Tro-Cortesianus.*) (作図: 小村明子)

生命の世界を、また西（黒）は死の世界を意味する。そして北（白）は神の世界を、また南（黄色）は人間の世界を意味する。そして十字架の中心に位置するのが、天の心（青）、地の心（緑）と呼ばれるマヤの二大創造神である。この両者は別名をテペウとグックマツツとも言う。これは何を意味するのか。マヤの十字架が世界創造のシンボルであるということである。マヤにはもう一つ世界創造のシンボルがある。マヤ神聖暦である。ただマヤ神聖暦が世界創造の時間的な認識であるとすれば、ここではそれが空間的な認識として表出されている。言い換えれば、マヤの十字架は現在も生成進化している宇宙そのものを表していることになる。

これに関連して一つの興味深い事実がある。古代マヤ人は多くのピラミッドを建設した。その理由が宗教的な情熱であったことは想像が付くが、それ以上のことはあまり知られていない。ピラミッド建設の本当の理由は何であったのか。一つの隠された事実がこの問いに答えてくれる。ピラミッドの底辺には実はマヤの十字架が描かれているのである。つまりピラミッドとはマヤの十字架そのものなのである。わかりやすく言えば、それは地上に造られた宇宙の模型、レプリカと言ってもよく、世界の創造と維持、発展を象徴する建造物である。そうした意味でマヤ世界において神聖な存在なのである<sup>78)</sup>。

現代グアテマラのマヤのシャーマン、アツハキツヒはマヤの儀式（写真8参照）を行う前にかなり手の込んだ祭壇を作るが、この祭壇はマヤの十字架の形に造られる<sup>79)</sup>。つまりここで祭壇はピラミッドを象徴していることになる。そしてアツハキツヒは儀式を行う際、マヤ神聖暦の20 ナワールに祈りながら、マヤの十字架の祭壇を燃やす<sup>80)</sup>。この世界でもおそらく類例のない聖なる



行為の目的は、世界の刷新、継続と進化の実現であり、同時にまたその調和を祈願するものである。

## 11. おわりに

これまで本論において、マヤの宇宙観を象徴するピソム・カッカ'アル（包まれた火）の内容を、6つのキーワードを取り上げて具体的に検証してきた。それではマヤの宇宙観の本質とは、最も重要な思想とは何なのか。私見ではやはりカバウルの思想に尽きるのではないと思われる。この調和の弁証法とも言うべき独特の二元論的思想は、極めてマヤ的なものである。二元論的思想は世界に数多存在するが、マヤほど二者の関係を本質的なものとみなし、またその協力関係を重要視したものは他にないであろう。カバウルの思想についてはすでに述べた通りであるが、それは想像する以上にマヤ文化の中に内包されている可能性がある。たとえば現代マヤ文化に残された二つの大きな遺産、マヤのカレンダーとマヤの十字架を考えてみると、この両者もまた同種の関係にあると思われるのである。すなわちマヤのカレンダーは、マヤ時間思想の結晶であるという点でマヤ世界の精神的側面を象徴しているが、これと対照的に、マヤの十字架は、マヤ世界の存在そのものを表現しているという点で世界の物質的側面を象徴していると言えるのである。すなわち、世界が精神と物質によって構成されているという二元論である。マヤ・キチエー文化の伝統に即して言えば、前者は天空の神、アハウ・テペウであり、後者は大地の神、チュチュ・グクマツツということになる。この両者は世界創造をした夫婦神であり、したがってその関係は最も根源的な意味でカバウルであることになる。

カバウルの思想はまたマヤ民族文化という地域性を超えて普遍性を持つものである。とりわけそれはその最終目標が「調和の実現」にあるという点で傾聴すべきメッセージを含んでいる。何故なら我々の住む現代世界は問題だらけであり、そこでは調和は破壊によって置き換えられ、また我々はそれを解決する叡智もヴィジョンも持ち合わせてはいないからである。そうした危機的な時代にカバウルに象徴されるマヤの宇宙観の思想を学び知することは少なからぬ意義を持つものであろう。このあまりにも知られざる民族の叡智がより多くの人々に知られることを祈りつつこの論稿を閉じることにする。

「天の心、地の心<sup>81)</sup>」

### 注

- 1) 多くの研究者は依然として古代マヤ人は運命論的な思想を持っていたと考えているが、これは無知から来る偏見で、筆者の調査研究によれば、マヤ文化の伝統は自由意思を重んじる極めて人間的なものである。

- 2) 用語としての「マヤの宇宙観 (La Cosmovisión Maya)」の起源は定かではないが、マヤ思想が宇宙と深い関わりを持つことに由来すると思われる。現在ではマヤの世界観、マヤの伝統文化というほどの意味で使われている。
- 3) Los Chortis グアテマラ北東部、ホンジュラス北西部の国境周辺に居住するマヤ先住民族。チヨルティ語は古典期マヤ語に極めて近い言語だと言われる。
- 4) Rafael Girard (1948). *Esoterismo del Popol Vuh*.
- 5) Miguel León-Portilla (1968), *Tiempo y realidad en el pensamiento maya*. ポルティージャはマヤ時間思想をすでに未来が決定している Cronovisión (時間幻視鏡) と名付けた。
- 6) マヤ宗教文化において蛇は大地、自然を表象し、権威、死と再生、豊饒等を意味するシンボルであった。
- 7) Los Tzotziles メキシコ、チアパス州、サンクリトバル・デ・ラスカサス一帯に住むマヤ先住民族。
- 8) Los Mames グアテマラ、メキシコ国境近くに住むマヤ先住民族。極めて古い起源を持つと言われる。
- 9) Juan de Dios González Martín (2001), *La Cosmovisión Indígena Guatemalteca, Ayer y Hoy*. 参照。
- 10) Victoriano Álvarez Juárez et. al., (1997), *Fundamentos de La Cultura Maya-K'iche': Interpretación y Estudio Científico del Libro Sagrado Pop Wuj realizado por los Sacerdotes Mayas de Guatemala*. 参照。
- 11) Francisco Ximénez, *Empiezan las historias del origen de los indios de esta provincia de Guatemala, traducidas de la lengua quiché a la castellana*. (アメリカ、ニューバリー博物館所蔵のヒメネスの対訳手稿)
- 12) Charles Etienne Brasseur de Bourbourg (1861), *Popol Vuh: Le Livre Sacré et les mythes de l'antiquité américaine*.
- 13) Adrián Inéz Chávez (1904-1987) マヤ・キチエー族の言語学者。キチエー語の特異性を考慮した独自の音声表記法を考案した。それに基づいた新訳 Adrián Inéz Chávez (1979), *Pop Wuj: Libro de Acontecimientos*. Traducción directa del manuscrito del padre Jiménez. は従来の訳とはまったく異なり、内外に大きな反響を呼んだ。
- 14) 現代に残されている神話『ポップ・ヴフ』は長い時間を経て成立したと思われるが、その前半部分は極めて古い時代に存在していた可能性が高く、考古学的事実からしても、おそらくはマヤ文字で記述されていたと思われる。
- 15) フナブとイシュバランケはシバルバーで生贄にされたフン・フナブ (Jun Jun Ajpu) とシバルバーの大王の娘、イシュキック (Ixkik) の間に生まれた。
- 16) ヴクブ・カキッシュ、及びその子供たち、シバクナ (Zipacna)、カブラカン (Cabracan)。
- 17) 冥界シバルバーを支配するアツハカメー (Aj Kamé) 一族。カメー (Kamé) は死という意味。「一の死 (Jun Kamé)」、「七の死 (Vucub Kamé)」とも言う。
- 18) たとえば近年先古典期マヤのエル・ミラドル遺跡で、水中を泳ぐフナブとイシュバランケが描かれている漆喰のレリーフが発見された。
- 19) B'alam Kitzé, B'alam Aqab', Maj U Kutaj, l'k ib'alam.
- 20) 260 個のピトの木の实を入れた神具。ツィッテはマヤの叡智の象徴であるが、アツハキツヒはこれを使って様々な神託 (adivinación) を行う。
- 21) Ajk'ij グアテマラのマヤ・シャーマンの一般的名称。「日 (光) を導く人」という意味である。

- 22) Momostenango。オリジナルなマヤの名前は Chotza'q' (マヤの祭壇の前で) と言う。人口5万人程度の小規模なマヤの町であるが、1,000人を超えるアツハキツヒが活動し、キチエー地方において最もよくマヤの伝統が残されているところである。
- 23) 逆説的に聞こえるが、マヤ・キチエー語には「時間」に該当する言葉が存在しない。しかしそれに相当する概念は存在する。それが Ki'ij (日、太陽)、Nahual (日のスピリット、叡智) である。
- 24) Cuenta Larga (スペイン語)、Long Count (英語)。これまでに発見された長期計算法の最古の記録は、タカリック・アバハの紀元前 200 年頃、最後はトニナーの西暦 909 年である。
- 25) 「日」はキチエー語で Ki'ij であるが、ユカテク語では Kin と言う。
- 26) 4 アハウ 8 クムクの西暦への年代変換については紀元前 3114 年 8 月 11 日、12 日、13 日等諸説あるが、ここではリンダ・シーリ等の 8 月 13 日説に依った。
- 27) 4 アハウ 8 クムクを記したキリグア石碑 C その他にはマヤ世界の創造を記念する物語が述べられている。この日に 13 バクトゥンが終わり、新しい世界が始まり、三つの礎石が地上に置かれた。やがて天空が創られ、三つの石は持ち上げられて天空に置かれたという。
- 28) Prudence M. Rice (2008), *Time, Power and the Maya, Latin American Antiquity*, 19 (3), 275-298. 長期計算法の石碑に描かれている内容は、そのほとんどが王の即位、死、戦争等の政治的事件である。
- 29) 神々は 4 度人間の創造を試みる。一度目は失敗して、「動物」が創られる。二度目は不完全な「泥人間」、三度目は人間の心を持たない「木で出来た人間」、そして最後に完全な「トウモロコシの人間」が創られる。
- 30) Haab (ユカテク語)、Jun Ajpú (キチエー語)
- 31) Solki'ij (キチエー語)、Zolkin (ユカテク語)
- 32) Izapa メキシコ最南部、タパチュラ近郊のマヤ先古典期の遺跡。その起源は古く紀元前 1800 ~ 2000 年に遡ると思われる。マヤ神聖暦、太陽暦はここで発祥したという説がある。
- 33) 古代マヤにおいて大蛇は自然、豊饒、また力の象徴であった。13 は横から見た大蛇の上歯または下歯の数を意味し、大蛇の歯の総数 ( $13 \times 2 \times 2 = 52$ ) もまた聖なる数と見なされた。
- 34) 現代グアテマラ・マヤの伝統では 260 日は女性の妊娠期間、人間の誕生を意味している。神聖暦の始まりは 8 バツツであるが、これは性行為の際の男女の手足の合計を意味している。
- 35) マヤのカレンダーの大きな特徴は、時間は循環するものではあるが、同時に人間が自らの自由意思で発展させうる、可変的な存在として捉えられていることである。その意味で螺旋的な運動を成すものである。
- 36) Virginia Ajxup Pelicó et. al. (Elaboración) (2003). *Concepción Maya del Tiempo y Sus Ciclos*. Consejo Maya "Jun Ajpú' Ixb'lamke."
- 37) 52 が古代マヤの蛇信仰との関係で聖なる数であることはすでに述べたが、ここでは太陽暦と神聖暦の同一日が再び出会う周期が 52 太陽暦年 (73 神聖暦年) であるという意味である。
- 38) マムは新年の神である。(ある意味で日本の歳神、干支に似ている。) 正確な経緯は不明だが、20 ナワールの中のノツホ、イック、キエツヒ、エーの 4 つが抜擢され、マムとなった。これらは 20 ナワールの順番で、5 つごとに起きるナワールである。マヤ世界は、大きな意味で、その年のマムの支配下にある。
- 39) ナワールはマヤ神聖暦の日のスピリットであるが、その働きは生きている人間に実践的な叡智を与えるものである。

- 40) マヤの伝統は複雑に分化している。20 ナワールの開始日は、グアテマラにおいてはバツツ (B'atz) であるが、ユカタンにおいてはイミッシュ (Imix) である。
- 41) 時間を単なる尺度と考える現代人には、時間がスピリットを持ち、あるいはエネルギーを持っているという発想は容易には理解しがたいものである。しかしマヤ人は、時間が生きている存在であり、絶えず変化と進展を重ね、世界を生成、創造していると考えた。
- 42) 古代マヤ人は極めて哲学的な傾向を持った民族であった。現代マヤ人もまた然りである。
- 43) アメリカを中心としたいわゆるニューエイジ系の人々は、マヤのカレンダーを、その他の神秘的な伝統と習合させ、ほとんど原形をとどめないマヤのカレンダー (マヤ占い) を作り出した。
- 44) 双子の兄妹はシバルバーに旅発つ時、祖母シュムカネに「このトウモロコシの茎が枯れたら我々が死に、また生き返ったら我々が復活したと思ってください」と言い残す。このトウモロコシの茎は死と再生を意味する。
- 45) マヤの世界観においては、死は生命の源泉である。生命は死から誕生し、死に帰る。その意味で死はほぼ自然の同義語として使われている。
- 46) Jun Ba'tz, Jun Choen フナブ、イシュバランケの異母兄弟。二人を妬み、殺そうとしたため、罰として猿に退化させられる。しかし同時にまた三番目の「木で出来た人間」の世代に属し、文化、芸術、音楽の象徴でもある。
- 47) 曼荼羅は密教 (仏教) における宇宙観、人間観、あるいは教育システムの表象であるが、マヤ神聖暦もまた、同様の目的をもって、時間という視点から編纂された一種の曼荼羅と言えないこともない。
- 48) マヤ神聖暦の持つ最大の特徴は、それが人間としての生き方、倫理性を明示しているということである。
- 49) ドン・マヌエルは人間の二元性、善悪に揺れる人間性の問題を絶えず強調していた。それはあたかもゾロアスター教の善悪二元論を聞いているようでもあった。
- 50) 個人における調和、家族における調和、社会における調和、自然における調和、宇宙における調和
- 51) カバウィルは不思議な神でマヤ・キチエー神話でも最初の頃に登場するが、それほど大きな役割を果たしているわけではない。純粋な天空の神としてはフンラカン、テベウなどがいるが、カバウィルはその名前からして、二元性を持った、天と地を繋ぐ目的で存在した異神であった可能性もある。
- 52) カバウィルの関係では、二者は必ず異質な、相補的な存在でなければならない。
- 53) 神話『ポップ・ヴフ』は重層的なシンボリズムを内包している。その一つがカバウィルの表現であり、とりわけその前半部分はすべてこのマヤ二元論で統一されている。
- 54) このユニークな協力関係は世界最古のビジネス・パートナーシップの例であろうか。
- 55) *Ri Mam* (1995). Momostenango, Guatemala: Kajib N'oj. 参照。
- 56) G. W. F. Hegel. 19世紀ドイツ観念論哲学者。主著『精神現象学』、『法哲学』等。
- 57) Los Tz'utujiles ツトゥヒル族はグアテマラ、マヤ・キチエー地方、アティトラン湖の南岸を中心に居住しているマヤ先住民族である。中心はサンティアゴ・アティトラン (Santiago Atitlán)。
- 58) Robert S. Carlsen & Martin Prechtel (1991), *The Flowering of the Dead: An Interpretation of Highland Maya Culture*. *Man*, 26 (1), 22-42.
- 59) Palenque. 古典期マヤを代表する都市国家。紀元前100頃～西暦800年頃。パカル王 (K'inich

Janab' Pakal) の時代 (AD615 ~ 683) に全盛期を迎えた。

- 60) パレンケの三大神。GI (神 I) 名前不詳。「十字架の神殿」に祀られる。三神の中で最年長。最高神。太陽—海洋神。おそらくは世界創造の神。GII (神 II) 名前: カウシル (Kawil)。葉十字の神殿に祭られる。三神の中で最年少。稲妻、王の権威、農業神。GIII (神 III) 名前: キンニチ・アハウ (Kinich Ajaw) の一呼称。「太陽の神殿」で祀られる。太陽神、戦士の神。
- 61) Cofradía コフラディアはスペイン人カトリック修道士によって 16 世紀にグアテマラに移植されたが、その後独自の発展を遂げた。グアテマラの各市・町・村には多くの守護聖人 (Patrón) が祀られているが、それを信奉するコフラディアが存在する。
- 62) Syncretism 宗教的混交、宗教習合などと訳される。二つ以上の宗教伝統が混じり合うこと。グアテマラはシンクレティズムの国であるが、日本もまたそうで、神仏習合はあまりにも有名である。
- 63) Hector Gaitán A. y Otto Chicas Rendón (1995). *Recetario y Oraciones Secretas de Maximón*. 参照。
- 64) San Pascual Bailón (1540-592). スペインのフランシスコ派修道士。死後、聖人となった。
- 65) Aj Itz 黒呪術 (brujería) を行うマヤのシャーマン。
- 66) フランシスコ・ソフエル (Francisco Sojuel) は 19 世紀後半から 20 世紀にかけてサンティアゴ・アティトランに存在したマヤのアハキツヒ、聖者である。1907 年に死去したことがわかっているが、多くの奇跡を起こして村人に敬愛され、伝説化されたために、実在の人物についての詳細は不詳。
- 67) E. Michael Mendelson (1965), *Los escándalos de Maximón: un estudio sobre la religión y la visión del mundo en Santiago Atitlán*.
- 68) La Semana Santa. カトリック最大の祭礼。キリストの受難に基づき、枝の主日から復活祭の前日までの一週間を指す。プロテスタントでは受難週 (イースター) と言う。
- 69) Aj-Au Aj は関係代名詞「~するもの、者」、Au は「生命を与える」の意味。Ajau はまた人間が吐く息の音を意味する。
- 70) Robert S. Carlsen & Martin Prechtel (1991), *The Flowering of the Dead: An Interpretation of Highland Maya Culture*. *Man*, 26 (1), 22-42.
- 71) V. Garth Norman (1976), *Izapa Sculpture (Part 2 Text)*.
- 72) この十字架は Cruz Foliada (葉十字) と呼ばれ、人間化されたトウモロコシを十字架にしたものである。
- 73) このあまりに有名なモチーフは、これまでパカル王の冥界シバルバーへの下降とされていたが、最近、王の死からの復活を表していると解釈する研究者が増えている。
- 74) *El Códice de Madrid*. 二種類の絵文書が合体されているので、*Códice Tro-Cortesianus* とも言う。スペイン、マドリッドの El Museo de América 所蔵。14 世紀、あるいは 15 世紀に作成されたと考えられている。112 葉。マヤのカレンダー、予言、宇宙観等が描かれている。
- 75) Itzamná 古典期マヤの最高神。その後主にユカタンの伝統として継承される。
- 76) Chackchel ユカタン・マヤの月の神。グアテマラ・マヤの女神 Ixchel に当たる。
- 77) I'k. マヤ神聖暦 20 ナワールの一つ。空気、息を意味する。
- 78) 神話『ポップ・ヴフ』の冒頭には古代マヤ人が宇宙をいかに理解したのか、何故それがピラミッドの形であるのかが比喩的に述べられている。
- 79) マヤの祭壇の構成材料はロウソク、コパール、クイリコ、オコーテ、米、砂糖等である。赤、黒、

黄色、白のロウソクを東西南北に立て、その他の材料を十字の形に並べる。

- 80) マヤ文化においては、火は太陽の象徴であり、またそのスピリット、フナブの象徴である。したがって十字架を燃やすということは、世界を知性と叡智によって活性化することを意味する。
- 81) マヤの祈りの言葉。"Ukux Kaj, Ukux Ulew."

#### 参考文献

- Ajxup Pelicó, Virginia et. al. (Elaboración) (2003). *Concepción Maya del Tiempo y Sus Ciclos*. Consejo Maya "Jun Ajpú' Ixb'alamke." Guatemala: Kab'lajuj Imox.
- Ajxup, Virginia y Zapil, Juan (Elaboración) (2009). *Propuesta de Armonía y Equilibrio entre Mujeres y Hombres desde La Cosmovisión Maya*. Guatemala, Guatemala, C. A.: Asociación Pop No'j.
- Álvarez Juárez, Victoriano et. al. (1997). *Fundamentos de La Cultura Maya-K'iche': Interpretación y Estudio Científico del Libro Sagrado Pop Wuj realizado por los Sacerdotes Mayas de Guatemala*. Quetzaltenango, Guatemala: Material inédito.
- Álvarez Juárez, Victoriano (2005). *Sinopsis Sobre los Diferentes Aspectos de la Cultura Maya-Tolteca*. Quetzaltenango, Guatemala: Editorial-K'iche' Tz'ib'-Timaç-
- Astor-Aguilera, Miguel (2009). Mesoamerican Communicating Objects: Mayan Worldviews Before, During, and After Spanish Contact. In Leslie G. Cecil and Timothy W. Pugh (Eds.), *Maya Worldview at Conquest* ( pp.159-182). Boulder, Colorado: University Press of Colorado.
- Aveni, Anthony (2009). *The End of Time: The Maya Mystery of 2012*. Boulder, Colorado: University Press of Colorado.
- Barrios, Carlos (2006). *Ch'umilal Wuj: El Libro del destino, astrología maya*. Guatemala, Guatemala, C. A.: CHOLSAMAJ.
- Bošković, Aleksandar (1989). The Meaning of Maya Myths. *Anthropos*, 84, 203-212.
- Bunzel, Ruth (1967). *Chichicastenango: A Guatemalan Village*. Third printing. Seattle and London: University of Washington Press.
- Cabrera, Edgar (1992). *La Cosmogonía Maya*. San José, Costa Rica: Liga Maya Internacional.
- Carlsen, Robert S. and Pretchtel, Martin (1991). The Flowering of the Dead: An Interpretation of Highland Maya Culture. *Man*, 26 (1), 22-42.
- Carmack, Robert M. (1973). *Quichean Civilization: The Ethnohistoric, Ethnographic, and Archaeological Sources*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.
- Carrasco, David (1995). Cosmic Jaws: We Eat the Gods and the Gods Eat Us. *Journal of the American Academy of Religion*, 63 (3), 429-463.
- El Códice de Madrid (Tz'ib'rech Madrid): Codex Tro-Cortesianus*. (2007). Reproducción comentada por Federico Fahsen y Daniel Matul Morales. Ciudad de Guatemala, Guatemala: Liga Maya Guatemala.
- Coe, Michael D. (2011). *The Maya*. Eighth edition, fully revised and expanded. New York, New York: Thames & Hudson.
- De La Garza, Mercedes (1990). *Sueño y Alucinación en el Mundo Nahuatl y Maya*. D. F., México: Universidad Nacional Autónoma de México.

- De La Garza, Mercedes (1998). *El Universo Sagrado De La Serpiente Entre Los Mayas*. D. F., México: Universidad Nacional Autónoma de México.
- Demarest, Arhur (2004). *Ancient Maya: The Rise and Fall of A rainforest Civilization*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
- Deus, Krystyna (2007). *Shamans, Witches and Maya Priests: Native Religion and Ritual in Highland Maya*. London, UK: The Guatemalan Maya Center.
- Diaz-Bolio, José (1955, 1998). *La Serpiente Emplumada: eje de culturas*. Merida, Yucatan, México: Registro de Cultura Yucateca.
- Gaitán A., Héctor y Chicas Rendón, Otto (1995). *Recetario y Oraciones Secretas de Maximón*. Guatemala y Nueva York: Casa de las Velas (distribuidores).
- Girard, Rafael (1948). *Esoterismo del Popol Vuh*. D. F., México: Editorial Stylo.
- Girard, Rafael (1962). *Los Mayas Eternos*. D. F., México: Libro Mex Editores.
- González Martín, Juan de Dios (2001). *La Cosmovisión Indígena Guatemalteca, Ayer y Hoy*. Estudios Sociales No.65. Guatemala: Instituto de Investigaciones Económicas y Sociales, Universidad de Rafael Landívar.
- Hart, Thomas (2008). *The Ancient Spirituality of the Modern Maya*. Albuquerque, New Mexico: University of New Mexico Press.
- Houston, Stephen D. and Inomata, Takeshi (2009). *The Classic Maya*. Cambridge, UK and New York, USA: Cambridge University Press.
- Knowlton, Timothy W. and Vail, Gabriel (2010). Hybrid Cosmologies in Mesoamerica: A Reevaluation of the Yax Ceel Cab, a Maya World Tree. *Ethnohistory*, 57 (4), 709-739.
- León Chic, Eduardo (1999). "El Corazón de la Sabiduría del Pueblo Maya" : "Uk'u'xal Ranima' Ri Quano'jib'al" . Iximulew, Guatemala: Fundación CEDIM.
- León-Portilla, Miguel (1986). *Tiempo y Realidad en el Pensamiento Maya*. Segunda Edición. DF, México: Universidad Nacional Autónoma de México.
- El Libro de Los Libros de Chilam Balam* (1985). Traducción por Alfredo Barrera Vázquez y Silvia Rendón. Colección Popular. D. F., México: Fondo de Cultura Económica, S. A. de C. V.
- Love, Bruce (2004). *La Cultura Maya en el Yucatán de Hoy*. Segunda edición. Mérida, Yucatán, México: Editorial Dante S. A. de C. V.
- Malmström, Vincent H. (1997). *Cycles of the Sun, Mysteries of the Moon: The Calendar in Mesoamerican Civilization*. Austin, Texas: University of Texas Press.
- Medina, Tito (2000). *El Libro de La Cuenta de Los Nawales*. Iximulew, Guatemala: Fundación CEDIM.
- Megged, Nahum (1991). *El Universo del Popol Vuh*. D. F., México: Editorial Diana, S. A. de C. V.
- Memorias del Segundo Congreso Internacional sobre el Pop Wuj* (1999). Quetzaltenango, Guatemala: TIMACH.
- Memorias del Tercer Congreso Internacional sobre el Pop Wuj* (2007). Quetzaltenango, Guatemala: Publicaciones Liga Maya Guatemala, Centro de Estudios Mayas TIMAC, Grupo AMANUENSE.
- Mendelson, E. Michael (1965). *Los Escandalos de Maximón: Un estudio sobre la religión y la visión del mundo en Santiago Atitlán*. Versión española de Julio Vielman. La Tipografía Nacional de Guatemala, C. A.

- Molesky-Poz, Jean (2006). *Contemporary Maya Spirituality: The Ancient Ways Are Not Lost*. Austin, Texas: University of Texas Press.
- Norman, V. Garth (1976). *Izapa Sculpture, Part 2: Text*. Provo, Utah: New World Archaeological Foundation, Brigham Young University.
- Paxton, Merideth (2001). *The Cosmos of the Yucatec Maya: Cycles and Steps From the Madrid Codex*. Albuquerque: University of New Mexico Press.
- Popol Vuh: El Libro Sagrado y Los Mitos de la Antigüedad Americana* (1972). Según el texto francés del abate Chaeles Etinne Basseur de Bourbourg. Guatemala, C. A.: Editorial Universitaria, Universidad de San Carlos.
- Popol-Vuh: Las Antiguas Historias de Quiché* (1995). Séptima reimpresión. Traducido del texto original con introducción y notas por Adrián Recinos. (versión original publicada en 1947) El Salvador, Centroamérica: Editorial Piedra Santa.
- Popol Vuh* (1973). Versión actualizada, basada en los textos quiché, castellano, y anotaciones al manuscrito de fray Francisco Ximénez, o. p. Traducción por Agustín Estrada Monroy. Guatemala: Editorial " Jose de Pineda Ibarra " del Ministerio de Educación.
- Pop Wuj: Libro de Acontecimientos* (1979). Traducción directa del manuscrito del padre Jiménez; traducido por Adrián Inés Chávez. D. F., México: La Casa Chata.
- Pop-Wuj: Poema Mitohistórico Ki-chè* (1997). Traducción directa del Manuscrito por Adrián I. Chávez. Quetzaltenango, Guatemala: TIMACH.
- Pop Wuj: Poema mítico-histórico K'iche'* (2007). Traducción directa del manuscrito del fray Francisco Ximénez por Adrián Inés Chávez. Quetzaltenango, Guatemala: Publicaciones Liga Maya Guatemala, Centro de estudios Mayas TIMACH, Grupo AMANUENSE.
- Popol Vuh* (1996). Introducción, versión en español y vocabulario por Albertina Saravia E. Traducción al idioma K'ichee' contemporáneo por Juan Rodrigo Guarchaj. Guatemala: Editorial Piedra Santa.
- Popol Vuh: The Mayan Book of the Dawn of Life and the Glories of Gods and Kings* (1996). Revised edition. Translated from the Quiche by Dennis Tedlock. New York and London: A Touchstone Book, Published by Simon & Schuster.
- Popol Vuh: The Mythic Sections-Tales of First Beginnings from the Ancient K'iche-Maya* (2000). Translated and edited by Allen J. Christenson. Provo, Utah: The Foundation for Ancient Research and Mormon Studies (FARMS) at Brigham Young University.
- Popol Vuh: Relato Maya del Origen del Mundo y de la Vida* (2008). Versión, Introducción y Notas de Miguel Rivera Dorado. Madrid, España: Editorial Trotta.
- Rice, Prudence M. (2007). *Maya Calendar Origins: Monuments, Mythistory, and the Materialization of Time*. Austin, Texas: University of Texas Press.
- Rice, Prudence M. (2008). Time, Power and the Maya. *Latin American Antiquity*, 19 (3), 275-298.
- Rice, Prudence M. (2009). Time, History and Worldview. In Leslie G. Cecil and Timothy W. Pugh (Eds.), *Maya Worldview at Conquest* (pp.61-82). Boulder, Colorado: University Press of Colorado.
- Ri Mam* (1995). Momostenango, Guatemala: Kajib N'oj.
- Rivera Dorado, Miguel (1986). *La Religión Maya*. Madrid, España: Alianza Editorial, S. A.



- Rupflin-Alvarado, Walburga (1999). *El Tzolkin Es Más Que Un Calendario*. Tercera edición. Iximulew, Guatemala: Fundación CEDIM.
- Sandoval, Franco (1994). *La Cosmovisión Maya Quiche en el Popol Vuh*. Segunda edición. Guatemala: Serviprensa Centroamericana.
- 実松克義 (2000) 『マヤ文明 聖なる時間の書—現代マヤ・シャーマンとの対話』現代書林
- 実松克義 (2001) マヤ文明の時間思想について 『聖徳大学言語文化研究所「論叢」』第8巻 207-232.
- 実松克義 (2005) マヤ民族のスピリチュアリティについて 藤岡美恵子・中野憲志編 『グローバル化に抵抗するラテンアメリカの先住民族』(現代企画室) pp.67-72.
- Schele, Linda and Freidel, David (1990). *A Forest of Kings: The Untold Story of the Ancient Maya*. New York: Quill, William Morrow and Company, Inc.
- Schele, Linda, Freidel, David, and Parker, Joy (1993). *Maya Cosmos: Three Thousand Years on the Shaman's Path*. New York: William Morrow and Company, Inc.
- Stuart, David and Stuart, George (2008). *Palenque: Eternal City of the Maya*. London, UK: Thames & Hudson.
- Taube, Karl A. (1988). A Prehispanic Maya Katun Wheel. *Journal of Anthropological Research*, 44 (2), 183-203.
- Tedlock, Brabara (1992). *Time and the Highland Maya*. Revised edition. Albuquerque, New Mexico: University of New Mexico Press.
- Thompson, J. Eric S. (1966) *The Rise and Fall of Maya Civilization*. Second edition. Norman, Oklahoma: University of Oklahoma Press.
- Vail, Gabriel (2000). Prehispanic Maya Religion: Concepts of divinity in the Postclassic Maya codices. *Ancient Mesoamerica*, 11, 123-147.
- Vail, Gabriel (2009). Cosmology and Creation in Late Postclassic Maya Literature and Art. In Leslie G. Cecil and Timothy W. Pugh (Eds.), *Maya Worldview at Conquest* (pp.83-110). Boulder, Colorado: University Press of Colorado.
- Vallejo Reyna, Alberto (2001). *Por los Caminos de los Antiguos Nawales: Ri Laj Mam y el Nawalismo Maya Tz'utuhil en Santiago Atitlán, Guatemala*. Iximulew, Guatemala: Fundación CEDIM-NORAD.
- Vogt, Evon Z. (1969). *Zinacantan: A Maya Community in the Highlands of Chiapas*. Cambridge: Harvard University Press.
- Vogt, Evon Z. (1979). *Ofrendas Para Los Dioses: Análisis simbólico de rituales zinacantecos*. Primera edición en español. D. F., México: Fondo de Cultura Económica.
- Watanabe, John M. (1983). In the World of the Sun: A Cognitive Model of Mayan Cosmology. *Man (New Series)*, 18 (4), 710-728.
- Watanabe, John M. (2006). *Los Que Estamos Aquí: Comunidad e identidad entre los mayas de Santiago Chimaltenango, Huehuetenango, 1937-1990*. Traducción por Eddy H. Gaytán. South Woodstock, Vt. USA: Plumsock Mesoamerican Studies, Centro de Investigaciones Regionales de Mesoamérica.
- Weeks, John M., Sachse, Frauke, and Prager, Christian M. (2009). *Maya Daykeeping: Three Calendars from Highland Guatemala*. Boulder, Colorado: University Press of Colorado.